

第73回 学術講演会

日時 平成29年11月30日(木)
午後6時～8時

場所 名古屋マリオットアソシアホテル
16階「タワーズボールルーム」

脳心血管病予防に関する 包括的リスク管理チャートの活用

代表世話人・座長 医療法人順秀会 理事長

加藤 秀平 先生

講演 I.

「脳心血管病予防に関する包括的 リスク管理チャート」の意義と実際

帝京大学医学部臨床研究医学講座特任教授
帝京大学臨床研究センターセンター長

寺本 民生 先生

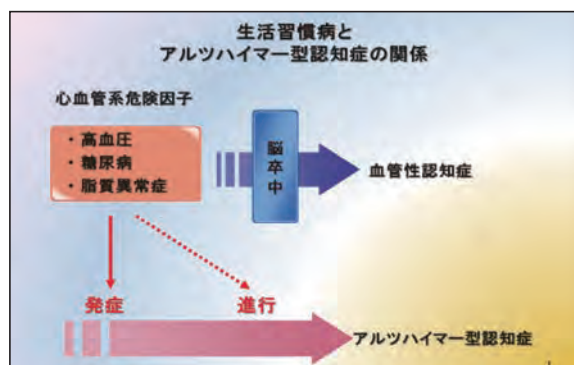


講演 II.

「超高齢社会における 脳の危機管理への貢献」

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター院長

松本 昌泰 先生



後援 / 愛知県医師会

この講演会は、愛知県医師会生涯教育認定講座2単位が取得できます。

講演I：

「脳心血管病予防に関する 包括的リスク管理チャート」 の意義と実際

帝京大学医学部 臨床研究医学講座特任教授
帝京大学臨床研究センターセンター長

寺 本 民 生 先 生



講演II：

超高齢社会における脳の 危機管理への貢献

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター院長

松 本 昌 泰 先 生



プロフィール

1973年3月 東京大学医学部医学科卒業
1973年6月 東京大学付属病院内科研修医
1975年3月 茨城県日立市日立総合病院就職
1975年5月 小平記念東京日立病院内科転勤
1976年4月 東京大学付属病院内科第一内科医員
1980年1月 東京大学文部教官助手
1980年10月 米国シカゴ大学留学
1982年10月 帰国
1984年1月 東京大学文部教官助手
1990年4月 東京大学第一内科医局長
1991年11月 帝京大学第一内科助教授
1997年4月 帝京大学 内科 教授
2001年4月 帝京大学 内科 主任教授
2010年4月 帝京大学 医学部 医学部長
2013年4月 帝京大学 理事
帝京大学臨床研究センター センター長
帝京大学医学部臨床研究医学講座 特任教授
2013年6月 寺本内科・歯科クリニック 内科院長
現在に至る

学会活動：

日本医学会連合(理事)、日本医学会(幹事)、
日本内科学会(功労会員・認定医)、
日本動脈硬化学会(名誉会員)、日本肥満学会(評議員)、
日本臨床分子医学会(評議員)、日本糖尿病学会(名誉評議員)、
日本循環器学会、日本内分泌学会、日本老年医学会(評議員)、
日本成人病(生活習慣病)学会(理事・評議員)、
日本病態栄養学会(評議員)

受賞：

2010年 日本動脈硬化学会 学会賞
2013年 大島賞

1970年 徳島県立城南高等学校卒業
1976年 大阪大学医学部卒業
1982年 大阪大学大学院修了(医学博士)
1984年 米国メイヨークリニック留学
(神経内科学教室；2年4カ月)
1997年 大阪大学講師 医学部第一内科(神経内科併任)
1999年 大阪大学大学院助教授
医学系研究科病態情報内科(神経機能医学併任)
2002年 広島大学大学院教授 脳神経内科学(第三内科)
2012年 日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員
(2015年3月まで併任)
2015年 JCHO星ヶ丘医療センター 院長
(2016年3月まで広島大学教授を併任)
現在に至る

学会活動：

日本神経学会、日本脳卒中学会、日本脳ドック学会、
日本動脈硬化学会など多数の学会で理事・評議員などを歴任。
また、世界脳卒中機構(WSO)理事も歴任し、日本脳卒中学会、
日本動脈硬化学会、日本脳ドック学会など多くの学会の会長を
歴任。

受賞：

松柏賞(1970年；徳島県立城南高等学校)、
メイヨークリニック研究奨励賞
(Department of Neurology, Research Award)(1988年度)、
日本心臓財団研究奨励賞(脳卒中部門)(1988年度)、
広島大学学長表彰(2011年度)、
美原賞(2015年度)など

「脳心血管病予防に関する包括的リスク管理チャート」 の意義と実際

帝京大学医学部 臨床研究医学講座特任教授
帝京大学臨床研究センターセンター長

寺 本 民 生

我が国の死因の第一位は悪性腫瘍であるが、主として血管という“臓器”に首座を置く第二位の心疾患と第四位の脳血管障害を合わせると、ほぼ悪性腫瘍と同等である。つまり、我が国においては、悪性腫瘍対策とともに血管病予防が極めて重要な保健対策といえる。我が国において、1960年代に猛威を振るった脳血管障害、特に脳出血については、塩分制限という生活習慣の改善指導が効を奏して、血圧の低下とともに著明な死亡率低下という予防医学上誇るべき歴史がある。一方、我が国の代表的疫学研究である久山町研究において、最近では脳血管障害に対する危険因子の寄与度として肥満や糖尿病、脂質異常症が高くなってきていることが示されている。したがって、我が国の脳心血管病を予防するためには、血圧はもとより肥満や糖尿病とともに脂質異常症など生活習慣病を管理することが重要であることは言うまでもない。さらに、これらの疾患群は頻度の高い疾患でもあるので、合併していることもあり、その場合には包括的な管理が要求されることがある。

我が国は冠動脈疾患（CAD）は多くはなく、脳卒中もアテローム血栓性脳梗塞は決して多くはなかったが、生活習慣の変化は疾病構造の変動をもたらし、CADやアテローム血栓性脳梗塞が増加し、我が国の医療費増大に大きくかかわってきている。このような事態を改善するためにも、包括的なリスク管理を行うことが重要であり、しかも若年からの生活習慣の改善が求められている。

現在ほぼ確立されているLDL-C、高血圧、血糖、肥満、慢性腎臓病などの危険因子に対応すべく各学会では診療ガイドラインをまとめている。このような学会を中心に、統合的な血管病管理指針を示そうという機運が高まった。そこで、日本内科学会を中心として11学会がその趣旨に賛同し、「脳心血管病予防のための包括的リスク管理チャート」を作成し、2015年に発表した。その基本的コンセプトは、生活習慣の包括的管理によるリスク（喫煙、肥満、血圧、血糖、血清脂質、腎機能など）の改善であるが、各疾患の重積の場合には、薬剤介入を含めた包括的管理が重要であることも強調したことである。また、我が国は、世界に冠たる長寿国家である。そして、高齢者ほど認知症も含めた脳心血管病の好発者であることも認識する必要がある。

本講演では、「脳心血管病予防のための包括的リスク管理チャート」の意義について知識共有するとともに、活用法についても議論したい。

超高齢社会における脳の危機管理への貢献

独立行政法人地域医療機能推進機構
星ヶ丘医療センター院長

松 本 昌 泰

高齢化社会の進展とともに、癌、認知症、脳心血管病などの高齢者に多発する疾病への対応が死活的に重要な保健衛生上の課題となってきた。なかでも、世界では4秒に1人が発症しているとされる認知症への社会的関心は高く、その早期診断や予防・治療法の確立が渴望されている。この認知症の最大原因とされるアルツハイマー型認知症については確実な予防法は未だ確立されていないが、次に頻度の多い血管性認知症については、脳血管障害の発症・再発予防の徹底や、急性期の脳卒中治療法の進歩などにより、認知症への進展を阻止することが可能な認知症（preventable dementia）であることに留意する必要がある。脳卒中は世界では2秒に1人が発症し、6秒に1人が死亡する極めてインパクトの高い疾病であり、突然発症し、認知症、うつ、てんかんなどの多くの後遺障害をもたらす病としても注目されている。脳卒中は、我が国の死亡原因としては第四位であるが、高齢者に多発する重度の介護状態である「寝たきり」の最大原因であり、血管性認知症の原因ともなることから、超高齢化社会における

脳心血管病対策は今後益々重要になるものと想定されている。

これらの動脈硬化が関わる脳心血管病の早期診断とその的確な発症予防法を確立する上で、非侵襲的な画像診断法の進歩が果たしてきた役割は極めて大きい。演者の専門とする脳血管領域においても、超音波計測法、X線CT検査、MRI、MRアンギオグラフィーなどの各種の脳画像診断法の応用により、subclinicalな無症候性脳血管障害の病態診断が可能となり、その脳卒中の発症・進展予防における意義が明らかとされるようになってきている。このような、脳の動脈硬化をめぐる病態診断法の変遷や脳血管障害の発症・進展予防法の進歩は、欧米諸国に比し脳血管障害の発症頻度が高い本邦において独自に発展を遂げた「脳ドック」の今日的意義を考える上でも極めて重要である。

本講演では、まず始めに、脳血管障害を専門とする立場からみた無症候性および症候性動脈硬化症の考え方と高齢者医療対策として重要な「健康寿命の延伸」を図る上での意義について概説する。さらに、演者のこれまでの臨床疫学的研究成果、脳血管障害の再発予防におけるスタチンの効果について検討した大規模臨床試験であるJ-STARSおよびその付随研究の結果を紹介し、その意義や今後の展望についてまとめる予定である。また、このような高齢化社会における脳の危機管理を考える上で、脳心血管病や認知症予防対策の充実は最も重要な課題といえるが、この課題を克服する上でも、包括的リスク管理チャートの活用が極めて有用と期待される。